

みる・きく・あるく

業界探検隊

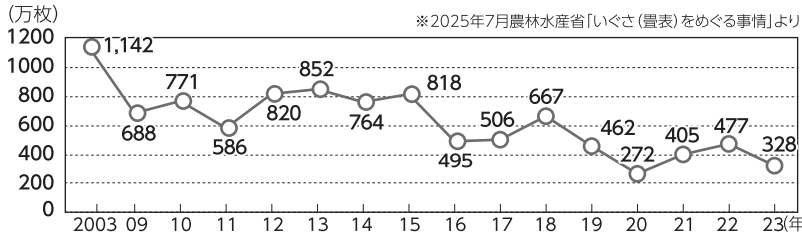
26 畳

「和み」を発信、需要喚起へ

「知らない」世代にアプローチ／近年は畳替え枚数が安定

日本固有の伝統的な床材・敷物である畳。現存する日本最古の書物『古事記』（712年）にも「菅畳八重」などの記述があり、その歴史は千年以上に及びます。日本の気候風土や「床に座る・寝る生活様式」に調和した住環境を提供してきました。畳の原料となるイ草の香りは、リラックス作用や睡眠の質向上など、さまざまな効果があるといわれます。畳需要は、洋風住宅の増加により、長期的には減少傾向が続いてきましたが、2016年以降、畳替え枚数は「概ね一定の枚数で推移」（農林水産省）しています（図）。「畳ならではの」魅力発信に努める業界を探検しました。

■ 畳替え枚数の推移



業界団体を訪ねて

畳は「良い」から残る

全日本畳事業協同組合

全日本畳事業協同組合は、45道府県1800軒以上の畳店が加入する業界最大の組織で、技能推進事業や品質表示事業を通じて、良質な畳の普及に努めています。岐阜市で創業205年の「(有)石河製畳店」を営む石河恒夫理事長ら、全国役員の皆さんが迎えてくれました。

一業界の課題をどう感じていますか？

石河 1990年代以降、洋風建築に押されて新築の和室が減り、畳の需要が長期的に減少してきました。地域で商売が成り立つ条件が掘り崩されています。畳店は、新規参入がほぼ無く、事業承継がほとんどなので、継ぐ人がいなければ廃業となってしまいます。現在、全国の畳店は推定6千～7千軒で、この30年で3分の1ほどに減りました。

一洋室と比べ、畳のある部屋の良さは何でしょうか。

石河 畳には調湿、吸塵、空気の浄化、防音など、さまざまな効能があります。弾力があり、フローリングに比べてケガをしにくいので、乳幼児や高齢者のいる家庭に適しています。何より、香りや色合い、肌触りなど、五感で感じられる「和み」=リラックス効果がある



▲全日本畳事業協同組合役員の皆さん。前列中央が石河恒夫理事長

ります。最近では、和風インテリアが再評価される

流れも生まれています。一今後の展望を、どうお考えですか。

石河 「日本の畳は無くなるのか」と問われれば、「ノー」です。なぜなら「良いものは残る」からです。先日、千葉市幕張のショッピングモールで畳体験イベントを初めて開催し、多くの来場者がありました。子どもたちからも「こんなに、いい香りがするんだ。初めて知った」と好評で、手応えを感じました。「畳を知らない世代」へのアプローチが鍵だと思います。



▲全日本畳事業協同組合が主催した畳体験イベント「8畳だヨ！全員集合」



▲「地域密着の商売をしています」と話す八巻さん

街の畳店を訪ねて

ストーリー語り顧客に理解広げ

「(有)八巻畳工業」代表取締役

八巻 太一さん(48)＝東京・北区民商

「畳替えは、どの畳屋に依頼しても同じではありません。安全・安心な畳。はげひうちに任せてください」一。こう話すのは、東京・北区民商主工会(民商)の「(有)八巻畳工業」代表取締役の八巻太一さん(48)です。1909(明治42)年創業、116年続く畳店の4代目です。メディアにも多数出演し、実演やワークショップ出店などを精力的に行っています。1級畳製作技能士の国家資格を持つ確かな腕と丁寧な情報発信、アフターケアで、リピーターをつかんでいます。

八巻さんのこだわりは、国産イ草を使った畳表(畳の表面を覆う部分、ゴザ)です。熊本県八代市のイ草農家・吉田昭則さんから直接仕入れ、お客から「刈ったイ草の香りを毎日、楽しんでいます」「ひ孫が来て歩き回ります。畳の足の裏の感触を忘れないでほしい」などと大好評です。『「中国産は悪」とは思いませんが、畳は日常的に直接、人の肌に触れるものなので、安全な素材を使いたい。私が仕入れる畳表のイ草は、残留農薬無し、化学染料不使用。で、太くて丈夫です」と自信をのぞかせます。吉田さんをほぼ毎年訪ね、イ草の植え付けや刈り取りを手伝います。

「うちの畳は、恐らく全国で一、二を争うほど高いと思いますが、『なぜ、その価格か』を説明できる品質や技術、ストーリーがあります。農家の過酷な作業の上に成り立っている国産畳表に自信を持っているし、それを理解してもらったお客さんには喜んでもらえます。幸せな仕事ですね」。畳にほれ込み、その可能性を追求し続けています。

探検隊が手縫い体験

15針ほどの針を下に上に 難しい…まさに「手に職！」

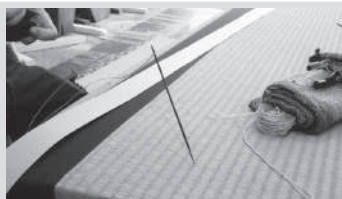
この道30年、東京都認可「職業訓練指導員」免許も持つ八巻さんに指導してもらい、畳床に畳表を縫い付ける「手縫い」を初体験させてもらいました。

15針ほどの畳針を使い(写真①)、手には「手当て」を装着(写真②)。針のお尻が「手当て」に当たるように持ちます。いざ、畳表を畳床に縫い付け。針を上から下へと刺します。この時、針は少し前(糸の前進方向)に向けて刺すと、ちょうど真下に刺さるそうです(写真③)。

針と糸が下に抜けたら、次は下から上へ…(写真④)。「この辺かな？」と刺してみるも、アレレ、全然思ったところに行かない！「何度か刺して、探りながらでもOKです」と八巻さん。

下から上へ刺せたら、糸の張りを保ちながら、肘で畳表を押しながら糸をこすり、送ります。こうすることで、糸がたるむのを防ぎ、しっかり縫い付けることができるそうです(写真⑤)。

とりわけ「下から上へ」の縫い付けが難しい！ まさしく「手に職」、積み重ねた経験がモノを言う世界だと痛感しました。八巻さんは一辺(約176針)を10分ほどで縫うそうですが、初心者は1時間以上かかるのではないのでしょうか…。



①長さ15センチほどの針を使います



②「手当て」を装着。鉄板が入っており、針を押しやす手に手のひらを守ります



③上から下に針を通します



④次に、下から上へ突き上げます



⑤下から糸が出たら、糸がたるまないように引っ張りながら肘で送り、しっかり張りを持たせます

探検隊 蘭草

蘭草は、畳表の原料となるイネ科の植物で、世界中に自生し、300種に及ぶとされます。日本の畳表は1989年以降、価格が安い輸入品がシェアを伸ばし、現在では約8割が中国産など。残りの約2割が国産で、うち95%以上が熊本県産です。国産蘭草は、栽培・収穫してから畳表になるまで2年近くを要します。

随想



小池 未来

田舎の小さなパン屋のレジは、意外なほどに多様な人生の断片が交差する場所だ。

レジは生活を映す鏡

先日訪れたおばあちゃんの話。パンを選ぶ姿は穏やかだったが、レジでの世間話で明らかに変わったのは「老老介護」の現実だ。夫の面倒を見ながら、自分も高齢で体力的にも精神的にも限界が近いという。要介護認定は低く、行政サービスがほとんど受けられていない。地域の高齢化が進む中、小さな買

では遊び心を込めたものが多く、自動翻訳では本質が伝わりにくいのだ。訪日ブームの恩恵を受けつつ、多言語対応を整えるべきか。レジの向こう側で、文化のギャップを感じる日々だ。そして、最近のレジで増える質問が「現金のみですか?」。今はキャッシュ

シユレス決済を導入していない。手数料の負担が大きいからだ。パンの単価は数百円単位と低く、そこに数パーセントの手数料がかかれば、利益を食いつぶす。それでもこの先の変化を無視できない。スマホ決済オンリーの若者層が増え、訪日外国人にも対応しなければ、取り残されるリスクがある。「現金と対話」の温もりを守り抜くハラスが、悩みの種だ。レジは金銭のやり取りを超え、生活の鏡。人々の介護の重み、異文化のワクワク、決済の進化を前に、パン屋の未来を焼きたての香りとともに考え続ける。(ベーカーリーハウス・コフレ)店主



長野県千曲市の上山田ホテル前庭にある碑「信濃路はるか」

2017年5月、受け入れ先と学校が協力してホテルの前庭に記念碑が建立されました。「信濃路はるか」と記した碑には「すりきりしホテルの畳敷間柿」という句や松葉つえの子どもの絵が描かれ、脇の小さな碑には疎開の概略が書かれています。当時の体験をつづった『千曲川のほとりで』私の学童疎開・上山田ホテル(今西美奈子著、2014年)という絵本も出版されています。

長野県は最も多く2万9千人ほどを受け入れています。子どもを親元から離し、集団で疎開させるなどということは、世界に例を見ない無謀なことです。

◆ ◆ ◆

長野県千曲市にある

◆ ◆ ◆

2017年5月、受け入れ先と学校が協力してホテルの前庭に記念碑が建立されました。「信濃路はるか」と記した碑には「すりきりしホテルの畳敷間柿」という句や松葉つえの子どもの絵が描かれ、脇の小さな碑には疎開の概略が書かれています。

アジア太平洋戦争末期、本土への空襲が始まると、都会の子どもたちを地方に疎開させる「学童疎開」が始まりました。「学童疎開促進要綱」には、「防空の足手まといを無くし、空襲の惨禍から若い命を護り、次代の戦力を培うこと」との目的が記されています。はじめは縁故疎開、1944年8月からは、国民学校初等科3年生から6年生の学童の集団疎開が実施され、45年になると、幼い1、2年生も加えられ、全国におよそ45万人が疎開しています。

長野県は最も多く2万9千人ほどを受け入れています。子どもを親元から離し、集団で疎開させるなどということは、世界に例を見ない無謀なことです。

戦後になっても校舎の再建が進まず、帰る学校のない子どもたちは、そのまま49年までホテルにとどまりました。ホテルはこの間、営業を休み、近隣住民も温かく接したそうです。

第29跡

肢体不自由児の疎開

(長野県千曲市)

アアジア太平洋戦争末期、本土への空襲が始まると、都会の子どもたちを地方に疎開させる「学童疎開」が始まりました。「学童疎開促進要綱」には、「防空の足手まといを無くし、空襲の惨禍から若い命を護り、次代の戦力を培うこと」との目的が記されています。はじめは縁故疎開、1944年8月からは、国民学校初等科3年生から6年生の学童の集団疎開が実施され、45年になると、幼い1、2年生も加えられ、全国におよそ45万人が疎開しています。

戦後になっても校舎の再建が進まず、帰る学校のない子どもたちは、そのまま49年までホテルにとどまりました。ホテルはこの間、営業を休み、近隣住民も温かく接したそうです。

こんなところに

戦争遺跡

戦後80年を記録し記憶する

